

2019. 3. 31. 受難節第4主日礼拝式説教

聖書：ヨハネによる福音書3章14-21節

『永遠の命を得るため』

受難節第4主日を迎えました。今朝も教会暦の聖書日課に従って与えられた聖書箇所聞いてまいりたいと思います。今朝は16節と17節を中心にして与えられた聖書箇所聞いてまいりましょう。

まず16節なのですが、原文の順序通りに訳してみますと、「というのも神はそれほどに世を愛されたので、それで独り子をお与えになった、彼を信じる者が一人も滅びることがなく、永遠の命を得るためである。」となり、神は世を愛された、ということがまず最初に語られています。かつ原文は日本語訳のように二つの文章ではなく、一つの文章で、世を愛された、とその後の言葉に全部つながっている。世というのはこの世のことで、わたしたちが住んでいるこの世界のことです。ヨハネによる福音書にはこの「世」という言葉が70回以上出てくるのですがその意味するところは一色ではありません。冒頭の1章で「世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。」とあって、この世界は神の言葉によって成ったが、世は神の言を認めなかった、ということが最初に語られています。世は神を認めようとせず、神抜きでやっていこうとする。事実イエス・キリストがきて、イエスを認めず、受け入れず、憎み、殺してしまった。

世は神とイエス・キリストに敵対する勢力となる。世というのは何も現代に限らない、いつの時代も神を認めようとしないで、自分たちの力でやっていこうとする、そういう勢力の渦巻くところだということです。

19節で「光が世に来たのに、人々はその行いが悪かったので、光よりも闇の方を好んだ。」とありますが、人間は神からの真理の光を受けてその真理によって導かれて生きることよりも、自分たちの思うように生きようとする。真理の光よりも闇の方を好む。世とは神と敵対する勢力。世とは神から目を背け、避ける勢力。しかしそれだけではない、世には神を求める者も、神を信じようとする人々も、すべて含まれている。だから、世の意味するところは一色ではない。ヨハネ福音書はそういう世の姿をさまざまに描きながらも、しかし、ここでまず、神は世を愛しておられる、という根本的なことが言われている。世がどれほど神に敵対する勢力

うずまくところであっても、世がどれほど神を退けようとする力の働くところであったとしても、神は世を愛しておられる。

愛しておられるから、神は独り子をこの世に与え給うのだ、というのです。新共同訳のように独り子を与えるほどに世を愛しているのだ、という意味も込められています。この世にキリストを与えた、ということは、この世にキリストを受肉させた、というだけでなく、十字架にかかって死んでいくことも含めた、キリストのいのちをこの世に与えた、ということの全部を言っているのです。神がこの世を愛する愛、それは独り子のいのち全部差し出す愛だった、というのです。

さらにその愛は、独り子を与えることで、信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るための愛だったというのです。

永遠の命という言葉聞いて、時間的にいつまでも続く命、ということを感じる人もいでしょうが、ヨハネ福音書で主が語るのは、人間が永遠なるものと出会うこと、永遠なるものに活かされることなのです。永遠なるものそれは、神の愛であり、イエス・キリストの愛、アガペーのことです。人間が、神によって与えられ遣わされたイエス・キリストのご自分のいのちの全部を差し出して、わたしたちのために十字架にかかり死んでいかれたその愛、アガペーと出会い、その愛の中にわたしは活かされている、そのことに気づくことこそ永遠の命を受ける、ということなのです。地上の生涯が終わりを迎え、いのちを終えても、神の愛、イエス・キリストの愛、永遠の命は、変わらずわたしたちの生かしてください。滅びることはない。

神はこの永遠の命をわたしが受けるために、御子を与えてくださった、それが16節が語っていることです。そして続く17節は、この16節の言い換え、別な言葉で表現している。つまり同じことを言っているのです。

神が御子を遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。神が御子を与えたのは、世を裁くため、悪い世なので滅ぼすためではなく、世が救われるため、すなわち一人一人が永遠の命を得るため、そのためなのだ。

神は世を愛しておられる。それが16節の冒頭にある言葉で、それがまず宣言される。その愛は、世がどれほど神と敵対する勢力になっても、神を退ける勢力になっても、キリストを殺してしまう勢力になっても変わることがない。滅ぼすためではなく、救うために神は御子を与え、神の愛、キリストのいのちという愛に出会い、その愛の中で活かされるよう、愛を与えてくださった。人はその愛を信じて受

ければいい。

キリスト教信仰の核というか、芯の部分はこの神の愛を十分であろうがなかろうが受ける、ということです。出会う、触れると言ってもいい。ああ神さまの愛に愛されているんだ、ということです。受難節というのは、キリストの苦しみ、十字架への歩みを思うときですが、それはまたキリストの愛に出会うとき、わたしたちを救うために命を献げたその愛に出会うときです。

イエス・キリストという方は、愛の思想家だったのではなく、あるいは愛をうたう詩人だったのでもない。キリストの愛は現実そのものであり、生身のからだを伴う強く激しいもので、その愛は神の強烈な意思によるものであったのです。しかもこの愛は救いにかかわるものである以上、気づいても気づかなくてもどちらでもいい、というようなものではなく、相手に応答を求める強く深い愛なのです。

ヨハネの手紙1に今日の聖書箇所直結する言葉が記されています。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちに生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を贖ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」ここに愛があります、という言葉、キリストの愛が、神の愛が、抽象的な議論や思想や道徳ではなく、端的な事実、具体的にこれだよ、というものがああります。別な言い方をすれば、十字架における愛、ここに神の愛が、キリストの愛がある、ということ信じること、感謝して受けること、感じ、知覚し、喜び、涙し、有難うございます、と言うこと。それがキリスト教信仰の核、芯、です。ここに、わたしを愛してくださる神の愛があるのだ、それを受けるところからわたしたちの信仰はいつも始まります。ここから聖書の言葉に聞きます。ここから神をもっと知ろうとし、ここからキリストをさらに深くさらに豊かに受け取ろうとします。

もしこのキリストの愛がまだ感じられないという人がいたら、聖書の言葉に聞いて、祈って待つことが必要です。思春期に親の愛がわからなくなり、親は自分を愛してないのではないかと、思う人がいます。そう思うだけでなく、親の存在を疎ましく感じる人がいます。しかし、その時も親が子を愛していないわけではない。愛されていても、それを受け取れない、という不幸はあります。しかしその時も親

は子を愛し続けている。わたしたちが心をキリストの方に向けていれば、キリストの愛を思い知る 때가、その愛の中にある自分に気づく時が与えられる、神はそのように聖霊の働きにおいて導いてくださる。受難節の日々、わたしたちはわたしたちの救いのために受肉なさって、いのちを献げて十字架にかかっていかれるキリストの愛を、心と体で受けながら、その愛の中にあることを思い知らされていきたいと思ひます。

D a t a : 受難節第4主日礼拝説教

讚美 : 前226、後403

新生教会礼拝堂